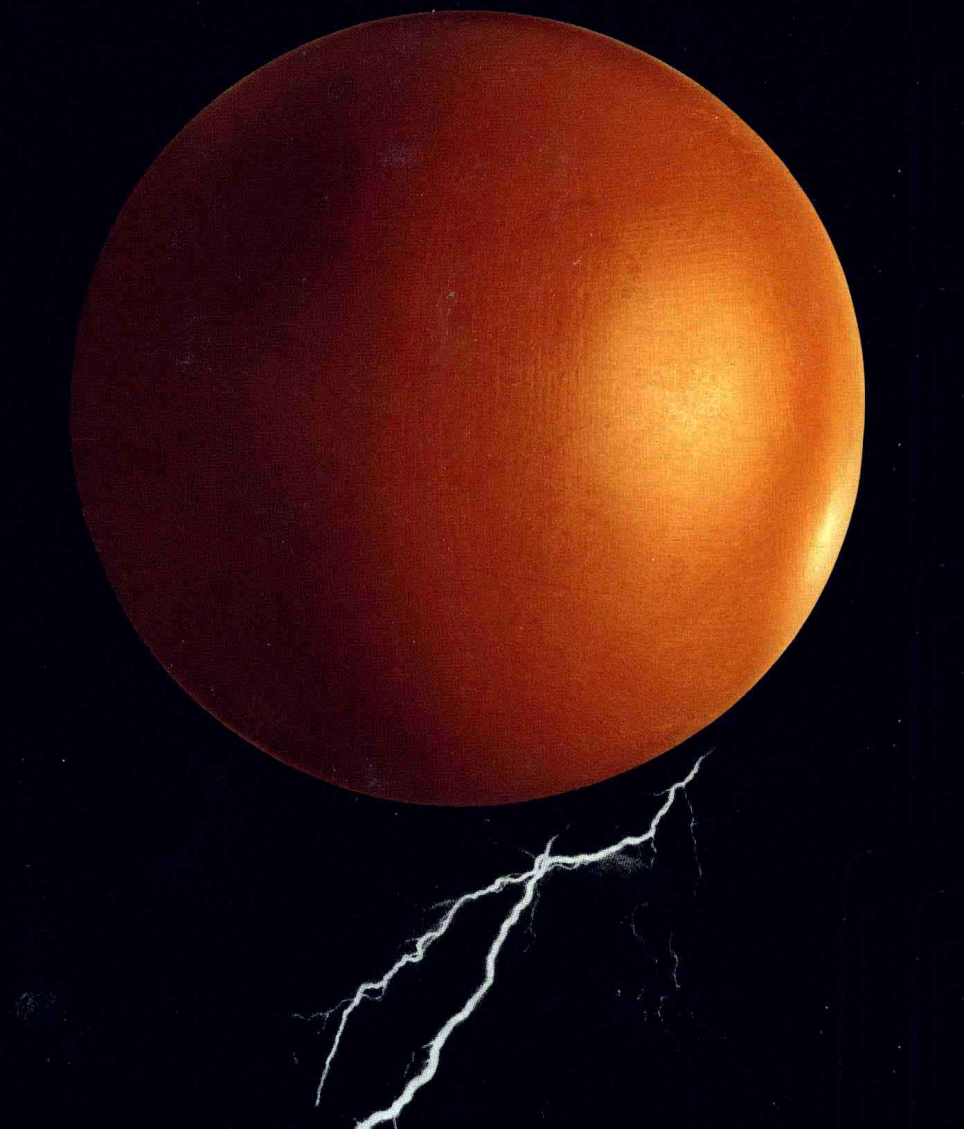
藝術の青春

アンドレイ・ヴォズネセーンスキイ

草鹿外吉訳



藝術の青春

アンドレイ・ヴォズネセーンスキイ
草鹿外吉訳

群像社

訳者　草鹿　外吉（くさか・そときち）
1928年，神奈川県鎌倉に生まれる。
早稲田大学大学院博士課程卒。現在，日本福祉大学教授。著書「ソルジェニーツィンの文学と自由」（新日本出版社）ほか。訳書，トリーフォノフ「気がかりな結末」（集英社）ほか。

藝術の青春

一九八四年九月二十五日　初版発行　©

定価　二〇〇〇円

著者　ヴォズネセーンスキイ
訳者　草鹿外吉
発行者　浅川彰三
発行所　株式会社　群像社
〒102　東京都千代田区平河町一―四―十二
振替　東京　四―九五九四三
電話　（〇三）二六四―〇三〇一（代）

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

藝術の青春

ヴォズネセーンスキイ
草鹿　外吉　訳

装幀 水谷武司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

わたしは十四歳…… 5
O（オー） 85
解説 255

わたしは十四歳…

「おまえ、パステルナークから電話だよ！」

唖然とした両親がわたしを見つめた。当時、六年生のわたしはだれにも内緒で、パステルナークに詩と手紙を送っていた。これが、わたしの人生を決定した最初の思いきった行為であった。そしたらなんと、かれが電話をかけてくれ、日曜日の午後二時、自宅に招いてくれたのである。

十二月のことだった。わたしがラヴルーシンスキイ横丁にある灰色の建物に到着したのは、もちろん一時間前である。少し時間をつぶしてから、リフトで七階の薄暗い踊り場にあがった。二時には、あとまだ一分あった。どうやら、リフトのあけたてが室内でも聞こえたらしい。中からドアが開いた。

かれが戸口に立っていた。

なにもかもが、わたしの前で揺れ動きはじめた。驚きをこめた細長い浅黒い顔が、燃える炎となってわたしを見つめていた。型がくずれ、てかてかになった一着のジャンパーが、かれのがっしりした体軀をつつんでいた。風がその前髪をそよがせている。後年かれが自画像を描くとき、かたわらに燃える蠟燭を配したのも偶然ではあるまい。かれは、ドアのすき間から入ってくる風をうけて立っていた。

ピアニストらしいやせた、力強い手先をしている。

禁欲的たたずまい、かれの暖房もしていない書斎の簡素きわまる空間にびっくりさせられた。壁にはマヤコーフスキイ[1]の四角い写真と短剣。ミュラーの英露辞典。その

(1)一八九三―一九三〇、ソ連の革命詩人。

ときかれは、翻訳の仕事にしばりつけられていた。机の上には、わたしの学習ノートがぽつんとのっていた。きっと話し合いのために用意したのだろう。恐怖と崇拝のうねりが、わたしの体内を通りぬけた。しかし、逃げだすにはもうおそい。

かれはいきなり話しはじめた。

その両の頬骨が、羽ばたく前にぴったりとすぼめた翼の三角骨のように、ぴくぴくと震えている。わたしはかれを熱烈に崇めていた。パステルナークの内部には、魅力と活力と、そしてこの世ばなれした不器用さとがひそんでいた。しゃべるときかれは、しばしば顎をつりあげ、上にひきのばすようにしたが、それはまるで、カラーから、胴体から、とびだしたがっているように見えた。

やがて、きわめて平静な気分でかれといられるようになった。そこでひそかに、かれを観察しはじめる。

その短い鼻は鼻梁のくぼみからはじまり、たちまち小隆起となり、それから真直ぐにつづいており、浅黒い銃床の模型を思わせた。スフィンクスのくちびる。短く刈りあげた白髪。しかし大事なのは、あたりに漂いけむるような磁力のうねりである。

「かれは自分自身を馬の目になぞらえた[1]」

二時間後、わたしはかれの原稿をかかえて出てきた。読ませてくれることになったのだが、一番貴重なのは、かれの新しい詩のかかれているエメラルド色のノートで、濃紅色の絹の撚り紐でとじられていた。わたしは我慢できずに歩きながらそれを

(1)アフマートワ『詩人あるいはパステルナーク』より。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひらき、言葉のいっぱいつまった詩行をつぎつぎとのみこんでいった。

この世のすべての樅の木　子どもたちのすべての夢
ともされた蠟燭のすべてのおののき　すべての鎖……

これらの詩行の中には、革命前のモスクワの学童の感覚がひそんでおり、パステルナークの謎におけるもっとも重要なもの――幼年時代がわたしを魅惑した。

ともされた蠟燭のすべてのおののき　すべての鎖

これらの詩行は、かれの晩年の澄んだ心境を宿している。わたしが出会ったのは、かれの秋であった。秋は限りなく透明である。だから、幼年時代の国も近かった。

……すべてのリンゴ　すべての黄金色の玉

この日からわたしの人生が定まり、魅惑あふれる意味と使命を見出したのであった。かれの新しい詩のかずかず、電話での会話、日曜日の二時から四時までのかれの家での語らい、散歩、仕合わせと子どもらしい熱中の数年がつづいた。

『降誕祭の星』

『降誕祭の星』パステルナークの長編小説『ドクトル・ジヴァゴ』（一九五六）の第十七編『ユーリイ・ジヴァゴの詩篇』の十八番の詩。小説はソ連で発表されず、詩篇のみ一九六五年『パステルナーク詩集』に収録発表された。

なぜかれは、わたしにこたえてくれたのだろうか？

当時の数年間、かれは孤独で悲運に疲れはて、人間関係の真心や純粋さが欲しく、仲間から脱出したいと思っていた。だが、それがすべてではない。未成年の中学生とのこの奇妙な関係、このほとんど友情ともいえるものが、かれの内部のなにものかを説明しているといえはすまいか？　これはまさに、獅子と犬との友情どころか、獅子と仔犬の友情というべきであろう。

ひょっとするとかれは、小学生のころスクリャービンのもとにかけつけた[1]自己を、わたしの中に見出し、それを愛していたのかも知れない。

かれは幼年時代に魅かれていた。かれの内部では、幼年時代の呼び声が途絶えることがなかった。

パステルナークは電話をかけられるのを好まず、いつも自分の方からかけてきた。どうかすると、一週間に何回もかけてきたものだ。かと思うと、重苦しい沈黙がつづいたりする。気をのまれたわが家のものたちにたいして、かれはけっして名前や父称をなのらず、いつも姓を告げるだけである。

かれの喋り方は、せかせかとして際限がない。やがて調子の乗りきったところで、突如、話を途切らせる。いかなる暗雲におおわれようとも、かれはけっしてこぼし話はしない。

(1)パステルナークは子どものころ、作曲家スクリャービンのもとにいき、音楽家になろうと志したが、挫折した。

かれはこういっていた。「芸術家はその本質において楽天的なものである。創造の本質も楽天的なものである。悲劇的作品をかいているときですら、力強くかくべきであり、うれいやためらいは、力のこもった作品を生みださない」と。その言葉は、絶え間なくむせるようなモノローグとなって流れた。そこには、文法というより、むしろ音楽がひそんでいた。かれの言葉はフレーズに分かれておらず、フレーズも単語に分かれていない。すべてが無意識な意識の流れとなって流れていた。思想は早口にもぐもぐと語られたり、あともどりしたり、魔力をおびたりする。かれのポエジーも、それと同じ流れであった。

パステルナークがペレジェールキノ[1]に完全に引越してしまうと、電話がかかることも少なくなった。その別荘には電話がなかったのである。かれは事務所に電話をかけにいった。夜のしじまに窓からもれるかれの声のこだまが響き、かれは星ぼしに向かって語りかけていた。わたしは、かれの電話のかかるのを待ちながら暮らした。別荘で新しい詩を読むとき、かれはよくわたしを呼んでくれた。

かれの別荘は木造で、スコットランドの塔を思わせるつくりだった。それは、さながら古いチェスのルーク（城）のように、耕地に仕切られた広大な長方形のペレジェールキノの野の一端の、別荘たちの隊列の中に立っていた。野原の反対側、墓地の向こうからは、敵方の駒のように十六世紀の教会と鐘楼がきらめいている。それらはま

（1）モスクワ郊外にある作家たちの別荘村。

るで彫刻をほどこされたキングとクインの駒のようであり、玩具のようにいろどられ、ワシーリイ・ブラジェーンヌイ寺院の小人の親戚のようでもあった。

別荘たちの隊列は、墓地の円屋根たちの必殺の照準に狙われて身をすくめていた。いまではもう、かつての住人たちのうち残っているものも僅かである。

朗読は大抵、二階にあるパステルナークの半円形の、壁の角灯に照らされた書斎でひらかれた。

みんなが集まってくると、階下から椅子が運ばれた。いつもお客は二十人ばかり。遅刻常習のリワーノフ[1]夫妻をみんなが待たされた。

サンルーム式の窓ごしにあたりの九月の景観が望まれる。森という森が燃えている。墓地に向かって車が一台、走っていく。ひとつの窓には蜘蛛の巣が張られていた。野原の反対側、墓地の向こうから、まるで雄鶏のようにいろどられた教会が、だれの墓をついばもうかと、斜に構えた姿をのぞかせている。野原の空気は震えている。そして、この書斎の空気にも、同じく興奮のおののきがひそんでいた。そこでは、期待をこめた神経が震えているのであった。

間をもたすために、チェーホフの作品のすばらしい朗読者であり旧アルバートのエリートたちの調音叉ともいうべきデ・エヌ・ジュラヴリョーフ[2]が、社交界のパーティでの坐り方を披露する。背筋を弓なりにし、肩甲骨だけが椅子の背にふれるようにするのである。つまりかれは、それとなくわたしに注意しているのである！　わたし

(1)一九〇四―七二、モスクワ芸術座の俳優。

(2)一九〇〇―?、俳優、朗読の名手。

は、顔の赤らむのを感じた。しかし、狼狽しながらも強情をはり、いっそう猫背になって、これ見よがしに肘をついてやる。

やっとのことで、遅刻の連中が現われた。夫人の方は、おずおずと、いかにも繊細優雅な物腰で、花がなかなか買えなかったといい訳する。亭主の方は大男で、両手を広げ、目をむいて、おどけまじりに驚いてみせる。モスクワ芸術座の舞台をゆるがせる名優で、ノズドリョーフ[1]とポチョムキン[2]の名演技で知られ、しかもごらんの通りのざっくばらんな旦那である。

一同、静粛。パステルナークがテーブルに向かう。かれは、今日流行になっているのに似たフレンチ風の薄地の銀色のジャンパーをまとっていた。このときかれは、『白夜』『うぐいす』『おとぎばなし』、いや、つまり、この時期のノートを全部、朗読した。最後は『ハムレット』だった。朗読しながらかれは、われわれの頭上にあるなにものか、かれだけに見えているものを見つめていた。その顔は長くやせ細っていた。そのジャンパーは、白夜のきらめきのようであった。

遠い日がわたしの目に浮かぶ
ペテルブルグの町はずれの家でのこと。
ステップのあまり裕福ではない地主の娘
きみは女学生　きみはクールスク出身。

(1)ゴーゴリの『死せる魂』の中の地主。
(2)映画『ウシャコーフ提督』の中の人物、大臣。

『白夜』、『ドクトル・ジヴァゴ』の詩篇、第四番。

朗読は普通、二時間近くつづいた。ときおり聴衆にたいしてなにか説明せねばならなくなると、まるでわたしに説明するかのようにかれは、こちらを向いた。「アンドリューシャ、わたしはこの『おとぎばなし』の中でね、救い主の騎士とその馬の鞍に乗った乙女、この二人の感情の標章をメダルに打ちだすようにしるしたかったのだよ」。これが、わたしたちの遊びだった。わたしはこの詩を暗記している。その中でパステルナークは、行動、対象、状況を規定する自己の方法を、最高潮に達せしめた。詩行の中で馬のひずめが、鳴りひびいていた。

とじ合わされたまぶた
空の高み　雲また雲
水また水　浅瀬に浅瀬　川また川
流れゆく歳月　そして幾世紀。

『おとぎばなし』、『ドクトル・ジヴァゴ』の詩篇、第十三番。

かれは聴衆の自負心を大切にしており、あとで順番に、だれにはどの詩が気に入ったかとたずねた。大半のものたちが「みんなよかった」と答える。かれは返事のあいまいさに不満を示した。そこでみんなが『白夜』をあげた。リワーノフ一人が『ハムレット』をあげる。『ハムレット』を上演できなかったことは、かれの悲劇であり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com